

脳の不思議スペシャル Part9

ゲスト: 石橋杏奈 千秋 徳光和夫 ビース(50音順)

優しい夫が壊れていく...

優しい夫が壊れていく...



2004年、東京都世田谷区、会社を経営する働き盛りの夫・亨さん(43歳)とイラストレーターの妻・礼さん(41歳)は、かわいい愛娘(7歳)と共に幸せな生活を送っていた。1年前に会社を設立した亨さんは、朝早くに出勤し、帰宅は11時頃という毎日で、過去に受けた健康診断では高血圧と診断されていた。血圧降下剤を処方されていたが、症状が出ないこともあり、忙しさにかまけて飲み忘れることが多かった。

2004年9月13日、会社で仕事中、亨さんは激しい頭痛に襲われる。社員に説得され、タクシーで病院へ向かうが、途中で意識を失ってしまった。一刻を争うと判断した運転手はすぐ目の前の病院へ、頭部のCT検査の結果、亨さんはクモ膜下出血を起こしていたことが分かった。8時間にも及んだ手術は成功したものの、脳にダメージを負っているため、体の麻痺や意識障害などが残る可能性があり、更にクモ膜下出血の後遺症として、脳の血管が痙攣し細く縮んでしまう「脳血管攣縮」を起こし、脳梗塞を起こす恐れがあった。妻は夫の手を握り、自分の命を半分わけてもいいから夫を助けて欲しいと祈った。2週間後、亨さんは奇跡的に意識を取り戻し、命の危機を脱することができた。少しずつ会話もできるようになり、術後の右手と右足にあった麻痺もハビリで徐々に回復していった。妻は小さなこと一つ一つに胸をなでおろした。しかし、この頃から気になることが...それは誰も面会に来いていない日のこと、夫がすでに亡くなっている人がさっき訪ねて来たと言いだした。更に、夫は自分が入院しているということと自覚していない。言葉自体はおかしくないものの、記憶と妄想が混同している様子だった。医師は「高次脳機能障害」の可能性が高いことを告げる。個人差はあるが、脳の損傷が原因で言語、思考、記憶、行為、学習、注意などに、様々な障がいが出るという。手術から3カ月、体の麻痺も見られなくなった。退院した。しかし自宅に戻った夫は、1日中横になったままなど、以前の夫からは考えられないような姿を見せる。妻は「高次脳機能障害」のリハビリを専門に行う病院に夫を週2日通わせた。退院してから半年、2005年6月、亨さんは娘とトランプなど頭を使って遊ぶゲームができるまでに回復。しかし近所のスーパーへ行くのに道に迷ったり、感情のコントロールができず、テレビに向かって乱暴な言葉を吐いたり、テレビと現実との混同が見られた。また昔のことも思い出せないばかりか、ついさっきの事も忘れてしまう...今後夫の症状が改善される見込みはなく、この障がいどう向き合っていくかが大事だと言われ、薄々感じはしていたが、心が引き裂かれる思いだった。妻は「高次脳機能障害」と向き合うことを意識し、専門書を改めて読み直した。しかし家はローンがまだ残っており、経済的な問題は深刻だった。夫が経営していた会社からは身を退くしかなく、夫が社会に復帰する場所がなくなっている現実を感じた。金銭感覚の障がいで、突然高額な絵を購入したり、病気であることを全く自覚していない夫の厄介な行動に、どうしよう妻礼さんは疲れ果て、死を考えるように...しかし実母からの言葉に思いとどまる。そんなある日、娘が熱を出し寝込んでしまい「栗ご飯が食べたい」という。その言葉を聞きなり、夫は家を飛び出した。しばらくして戻ってきた手には栗が...。道にも迷わず用事を忘れる事もなく、きちんと栗だけを買って帰ってきたのだ。この時妻は気付いた。自分は夫のこの一生涯でもっとくんな優しい夫が好きだったのだと、障がいのせいでは家族の形、夫婦の形は変わっても、相変わらず優しい夫の本質的なところは変わっていなかった。あれから6年、仰天スタッフが家を訪ねると、亨さんは4年前に、周囲の人の助けもあり、社会復帰を果たしていた。妻・礼さんは、昨年、夫の奮闘記を自らのイラストで本にまとめ、今ではこの障がいを少しでも多くの人に理解してもらう為、全国で講演活動を行っている。

次回放送内容

6月29日放送

まさかの食べ物に!
アレルギーの恐怖